

レーラインの鍵盤楽器教本研究 I

— 1765年ごろドイツ語圏において流布していた鍵盤楽器教本との比較研究 —

小野 亮祐
(2005年9月30日受理)

Die Eigentümlichkeit der Löhleins Klavierschule im Jahr 1765
Ein Vergleich der Löhleins Klavierschule mit dessen Zeitgenossissen

Ryosuke Ono

Das Ziel dieser Studien ist die Eigentümlichkeit der 1. Auflage der Löhleins Klavierschule(1765), besonders die Konstruktion des Inhaltes, klar zu machen, indem ich hier die Löhleins Klavierschule mit anderen zeitgenossissen Klavierschulen vergleiche. Aus der Folge dieser Studien kann ich klar machen, dass Löhleins Klavierschule nicht gründlich und systemtisch ist, aber kürz und bündig und umfassend verschiedenes Wissen und verschiedene Technik des Klavierspielens erklären, damit der Anfänger notwendiges Wissen für Klavierspieler mit Leitigkeit zu erlernen anfangen kann.

Key words: Klavierschule, Georg Simon Löhlein, Carl Philipp Emanuel Bach, Friedrich Wilhelm Marburg, Fingersetzung, Verzierung(Manieren)

キーワード: 鍵盤楽器教本, ゲオルク・ジモン・レーライン, カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ, フリードリヒ・ヴィルヘルム・マールブルク, 指使い, 装飾音

はじめに

筆者は従来 Georg Simon Löhlein(1725-1781) (以下「レーライン」と呼ぶ)の著した鍵盤楽器教本(以下単に「レーラインの教本」と呼ぶ)を調査してきた。特に本教本は1765年に出版されたのち、9度・約100年間にわたって改訂重版されたという特徴を有する。この点に注目し筆者は本教本の改訂を追っていく研究を進めている。

その出発点として本論文ではこのレーラインの教本の初版とその当時(1765年)流布していただろう同種類の教本を比較し、その中における特質を明らかにすることを目的とする。しかし、細かい比較検討はこの限られた紙面では不可能なので、今回は特に当時の鍵盤楽器教本で教えられていた大まかな項目ならびに指使いと装飾音の教程についての比較検討を試みる。

1. 1765年にドイツ語圏で流布していた鍵盤楽器教本(本論で用いる資料について)

1792年に出版された J. N. Forkel 著の音楽文献目録 *Allgemeine Literatur der Musik* には1765年までに出版された鍵盤楽器教本として以下の文献が挙げられている(年代順に表記)。

1. G. B. Doni *Trattato sopra gl' instrumeti di tasti di diverse armonie* (出版年不明)
2. M. de S. Lanbert *Principe du Clavcin* (1702)
3. F. A. Maichelbeck *Die auf Clavier lernende Cäcilia* (1738)
4. F. W. Marburg *Die Kunst das Clavier zu Spielen* (1. Teil:1750, 2. Teil:1761)
5. Ebd. *Anleitung zum Clavierspielen* (1754)
6. C. P. E. Bach *Versuch über die wahre Art das Clavier zu spielen* (1. Teil:1753, 2. Teil: 1762)
7. C. A. Thilo *Grundregeln*(1753)

8. Königsberger *Der wohl unterwiesene Clavierschuler* (1755)
9. G. Chr. Weitzler *Kurzer Entwurf der ersten Anfangsgründe, auf dem Clavier nach Noten zu spielen* (1757), in: F. W. Marburg (hrsg.) *Historisch-kritische Beyträge zur Aufnahme der Musik* 3. Band 3. Stück 1757
10. G. S. Löhlein. *Clavierschule* (1765)
11. M. Joh. F. Wiedeburg *Der sich selbst informierende Clavierspieler* (1. Teil: 1765)
 フォルケルの目録の出版年は、レーラインの教本が出版された1765年からは少し時代は下るが、本目録収録の教本が当時ドイツにおける教本の認識に近いものであろう。そこで本論文では筆者が実際に目にすることが出来た文献、2, 3, 4, 5, 6, 9, 10, 11ならびに、フォルケルには記されていないが、筆者独自の調査により入手することが出来た教本
12. P.C. Humano *Musicus Theoretico-Practicus* (1749)
13. F. Couprin *L'art de toucher le Clavcin* (1716/7)
 の2種を加えた10の教本を用いて1765年における音楽教本の状況とその中でレーラインの教本の位置を探ることにしたい（以下、教本名は「レーラインの教本」のように「名前+の教本」と呼ぶこととする）。

2. レーラインの鍵盤楽器教本 (初版)の内容

まず以下にレーラインの教本(初版)の目次を原文のまま挙げる。

1. Teil
 1. Cap.. Von den Anfangsgrunden zum Clavier-spülen
 2. Cap.. Von den Figuren der Noten und Pausen
 3. Cap.. Vom Tacte, oder Zeitmaße
 4. Cap.. Von den musicalischen Linien, Schlüssel und Noten
 5. Cap.. Von verschiedenen musicalischen Zeichen
 6. Cap.. von den Vorschlagen und übrigen Verzierungern
 7. Cap.. Von der Fingerordnung, oder Applicatur
 8. Cap.. Von der Melodie und vom Spielen selbst
 9. Cap.. Vom richtigen Notenlesen.
2. Teil
 1. Cap.. Von der Harmonie überhaupt
 2. Cap.. Von der Anwendung der Harmonie beym

Accompagnement

3. Cap.. Von den Intervallen
4. Cap.. Von den Klanggeschlechtern und Tonleitern
5. Cap. Von den Tonarten
6. Cap. Vom harmonischen Dreyklange
7. Cap. Von den Bewegungen
8. Cap.. Von den fehlerhaften Fortschreitungen
9. Cap.. Vom Accompagnement insbesondere
10. Cap.. Von der Sexte, und von der Quinte wo die Sexte nachgeschlagen wird
11. Cap.. Von der Sexte und Quarte
12. Cap.. Von der Septime
13. Cap.. Von der Sexte und Quinte
14. Cap.. Von der Quarte und Terz
15. Cap.. Von der Quarte und Secunde
16. Cap.. Von der None
17. Cap.. Von den übrigen Ziffern, so im Accom-pagnement vorkommen
18. Cap.. Von der Begleitung des Recitatives
19. Cap.. Von den Kunstgriffen, einen unbeziffer-ten Baß zu accompaneren
20. Cap.. Vom Fantasieren, oder vom Spielen aus dem Stegreife

第1章(1. Cap)では、本書の概要、鍵盤楽器の種類(チェンバロ、クラヴィコード、ピアノ)、教師の選び方といった、これから鍵盤楽器を習うに当たって初心者に必要なことが書かれている。

第2章から第5章まではいわゆる楽典の部分で鍵盤楽器を習うに当たって必要な楽譜上の記号・音符についての説明部分である。

第6章は「前打音と様々な裝飾音」と名付けられているが、いわゆる裝飾音の説明の章である。

第7章は指使いの説明の章でようやくテクニク的なことへの言及が始まる。

第8・9章は演奏をするに当たっての注意を、練習曲を交えて説明している。

以上が本書の第1部であり、またここから第2部が始まる。第2部は伴奏(通奏低音)の教程である。

第1章から9章までは和音の概念の説明、音程、音階、調性、3和音、進行、誤った進行の例(禁則)など声学上の基礎知識が語られる。

第10章から17章までは実際の通奏低音の数字とそれに該当する種々の和音が説明される。

第18章は劇場での鍵盤楽器奏者が必ず担当するレチタティーヴォ伴奏について、19章は数字がついていない場合の通奏低音のことについて説明され、最後には通奏低音を基礎にした即興演奏が教示される。

以上のことからこのレーラインに含まれる内容を大まかにとらえると、第1部は初学者への事前注意、楽典、装飾音、指使い、練習曲・演奏について、第2部は和声の基礎知識、数字と和音、レチタティーヴォ伴奏、数字なし通奏低音奏法、即興演奏、といえる。

3. 内容・構成についての比較・検討

レーラインの教本の大きな内容・構成をとらえたところで、ここではそれ以外の教本の同様に内容・構成を大まかにとらえ比較検討したい。しかし限られた紙面では、本論で用いる教本すべての目次を掲載することは出来ないで割愛する。その代わりに、先ほどのレーラインの教本の検討を基本にして比較表を作成することにする。それが、論文末の表1である。

Maichelbeckの教本はフォルケルによると鍵盤楽器教本に分類されているが、内容的には鍵盤楽器奏法については何も書かれておらず、通奏低音、和声法に関する教本だと言って良くこの考察から除外して良いと考える。

比較表を一通り見たところ、レーラインの教本ほど広範な内容を持った教本はエマヌエル・バッハの教本のみといえよう。ただし、バッハの教本は2巻に分かれていて、通奏低音に関するものは第2巻にまとめて述べられていることからすると、特にレーラインが1冊でコンパクトでありつつ広く網羅されていた教本であったことが分かる。内容・構成の点での網羅性がレーラインの教本の特色といえそうである。

また、バッハとクーブランの教本は楽典的知識の項目が見あたらない。このことは両者が全くの初学者向けには作られていない、もしくは事前に学習しておくべきことを意味していると思われる。また、バッハの教本の通奏低音に関する部分には、伴奏における装飾や、オルゲルブント、模倣、などについても書かれており鍵盤楽器奏法と銘打たれた物の中ではかなり詳細かつ高度な内容を持っていた通奏低音教程と思われる。

またフマーノの教本は和声を含む他の教本と違って、和声に関する項目が前半に来ており、後半に鍵盤楽器教程が来る構成となっている。先に理論的な事を習得してから、実践へと移る構成である。そして、最終的にはコラル演奏へと向かう構成となっていることから、教会でのオルガン奏者のコラル演奏の手引きとして特化されて作られた物であると考えてよいだろう。それに比してレーラインのものは、コラルには特化されておらず、劇場でのレチタティーヴォから即興演奏まで幅広く鍵盤楽器奏者におよそ想定される必要技術・知識を習得させようとする物であると思わ

れる。網羅性という意味ではレーラインに一番近い教本はバッハの教本といえよう。

4. 各教本の内容ごとの比較検討

以上の大まかな構成上の事からの比較検討に対し、ここでは、大まかな比較検討からは特に分かりにくい「指使い」の部分と「装飾音」の部分についての各教本との比較検討をしたい。

ここでも原文の目次を載せることはせず、適宜筆者がまとめ、項目ごとに番号を割り振って記してある。項目のあとに、必要に応じて筆者が注記事項を記している場合もある。

4-a) 各教本の指使いの教程

・レーラインの教本

1. 親指小指は黒鍵に置かない
 2. 長い指は曲げて短い指と同一線線に来るようにする
 3. 指の交差（長い指が短い指を越える、短い指が長い指の下をくぐる）
- 3つの運指に関する原則が置かれたあと音階と分散和音に関する譜例が3つだけ挙げられる。

・サン・ランベールの教本

1. 和音の指使い；2声（2/3/4/5/6/7/8度）
3声（4/5/6/7度）
4声
変化音での特例
 2. 基本原則1：演奏する人に適した指使いを選ぶべきであること
 3. 基本原則2：良い姿勢を保つべきであること（肘や体の位置）
- 譜例で具体例が示された後に基本原則と称する注意書きが2つ掲げられる。

・クーブランの教本

1. 右手の順次進行：3, 4, 5, 6, 7, 8度の練習。
2. 3度平行の練習。
3. トリルでの換え指の練習
4. 左手の順次進行の練習（度数は右手と同じ）
課題が練習用パッセージと共に掲げられているだけで、特に説明はない。

・マールブルクの教本1（Die Kunst）

1. 良い指使いの必要性。
2. 右・左手の各調（C-G-D-A-E-Dur/Moll）の音階における指使い（指の交差含む）。
3. 禁止される指使い。

4. 跳躍の場合での指使い。
5. 多声部を片手で演奏する場合の指使い(3, 4, 5声部)
6. 同音が連続する場合の指使い

・マールブルクの教本2 (Die Anleitung)

単一声部の場合の運指

1. 指の交差
 - 1) 親指が人差し指, 中指をくぐるとき。
 - 2) 人差し指, 中指が親指を越えるとき。
 - 3) 中指が薬指を越えるとき (古い運指)。
上記の場合でやってはいけない悪い例。
2. 同じ指の連続使用禁止の原則。
3. 順次進行で隣の指を飛ばすとき。
4. 同一音上で指を変えるとき。
5. 多声音楽において一つの声部を両方の手で演奏しなければならない場合。
6. 声部交差に伴う手の交差。
7. 多声音楽におけるときに複数声部が同時に同一音上に来るとき。
8. トリルとモルデントにおける特記事項

多声部の場合の運指

1. 2声 (2~8度まで), 3声 (4~8度まで) 4声 (5~8度まで)

実施練習

1. 順次進行の練習 (音階)
2. 分散音型・跳躍における練習
3. 上記1, 2の混合練習=巻末練習曲

・バッハの教本

1. 正しい運指法の必要性
2. 肘の高さ, 指, 手の形。
3. 黒鍵に小指, 親指を使わない原則
4. 各調性の順次進行における指使いの説明 (使用調: ハ長調, イ短調, ト長調, ホ短調, ヘ長調, ニ短調, 変ロ長調, ト短調, ニ長調, ロ短調, イ長調, 嬰へ単調, ホ長調, 嬰ハ短調, ロ長調, 嬰へ長調, 変ニ長調, 変ニ長調, 変ホ長調)
5. 多声における指使い
複数音同時に打鍵する場合
分散的に打鍵する場合
6. 指の省略。
7. 同一音上での指の交代。
8. 連続して同じ指を使う場合。
9. 黒鍵が多いときの特例。
10. 1声部を両方の手で演奏せねばならないとき。
11. 両手でユニゾン練習 (練習パッセージ)。

・ヴァイツラーの教本。

1. 各音にそれぞれ違う指をあてがうこと。
 2. どの音を右もしくは左手で弾くか見極めること。
 3. 音の間をあけないこと。
 4. 人差し指, 中指, 薬指の特質と使用法。
 5. 跳躍時の指使い。
 6. 黒鍵上での親指の使用禁止。
 7. 指の交差。
 8. 指を堅くしないこと。
- 基本原則の羅列で, 譜例などは一切ない。

・ヴィーデブルクの教本

1. 良い運指法について。
2. 指使いの原則論。
 - 1) 指の交差 2) 同一音上での指の交代 3) 同じ指を連続使用する場合
3. 2の原則論の実例 (譜例付き) と練習。

右手

1) 小指の使い方, 2) 親指が人差し指の下をくぐる場合, 3) 親指が人差し・中・薬指を越す場合, 4) 同一音上での指の交代, 5) 同一音の連続打鍵, 6) 指の省略

左手

1) ~6) は右手に同じ, 7) 連続する2音での同一指の使用, 8) 人差し指が親指を越えるときの3度跳躍

4-b) 指使いの教程についての比較検討

フランスのサン・ランベール, クープランは指使いについて余り多くを語らない (サン・ランベールが指使いの選択の自由を原則にしていく位である) 傾向にあるのに対し, ドイツのものはヴァイツラーをのぞき, ほとんどが原則論を掲げた後に実施例を多く譜例付き説明をしている。

またその叙述方法も, 単一声部の場合, 複数声部の場合と分け, 複数声部の場合は様々な声部数・音程をそれぞれ右手左手にさらに分けてシステマティックな形で実施例を載せている。

それに対し, レーラインは原則論を3つ載せ, その原則論の譜例も3つしか載せられていない。指使いの章に関してはレーラインはかなり手薄な作りである。しかし, 指使いの章では「指使いを実践音楽, 特に鍵盤楽器における主要な事項として取り上げる」と記して, 指使いをなおざりにするつもりではないことを述べている。

このように多くを述べていない理由に関しては次にあげるレーラインの指使いの章に記した言葉が暗示しているのではないと思う, 「この説明すべき規則は

以下の譜例の通りである。私はこの例を出来るだけ短くした」。また、前書きには「また、たいていのこの種の教則本はこの楽器の初心者のために書かれているのはずなのだが、ある程度の完全さが前提として要求される。そういうわけで、この私の小さな作品が全く有益ではないことはないと思う」と記している。

おそらくレーラインはこの限られた小著において、余り多くの完璧さを要求しないで初心者にも取り組みやすい物を目指したのではないだろうか。それは当時の鍵盤楽器初学者の鍵盤楽器教本に対する声の反映であったのかも知れない。

4-c) 各教本の装飾音教程

・サン・ランペールの教本

1. 装飾一般
2. トランブルマン
3. ドブル・カダンス
4. パンセ
5. ポール・ドウ・ヴォワ
6. クレ
7. アルベジオ
8. デタシェ
9. アスピラシオン

以上の装飾音に対して詳しい文章での説明と実例が付されている。

・クーブランの教本

1. パンセ・ドゥブルとポール・ドウ・ヴォワとトランブルマンの長さについて。
2. パンセの初めの音。
3. 連続する順次進行でのパンセをレガートで弾く奏法(左・右手, 上・下向)。
4. ポール・ドウ・ヴォワへのクーブランの見解。
5. トランブルマンについていくつかの注意
 - 1) すべての指で勉強すること
 - 2) 初めの方をゆっくり奏すること。
 - 3) 長い音符についたトランブルマンの特別な奏法
 - 4) 短い音符についたトランブルマン

6. 装飾音をゆっくり練習するべきであること。

それぞれに譜例をつけて詳しく説明してあるが、思いつきのようなあまり体系的でない叙述である。

・マールブルクの教本1 (Die Kunst)

単独の装飾音

1. ベーブंक, 2. 前打音, 3. モルデント, 4. トリル, 5. アッチャカトゥラ, 6. ドッペルシュラク, 7. シュライファー, 8. ロール, 9. シュネラー, 10. アルベジオ

装飾音の組み合わせ

1. 前打音とモルデント
 2. 前打音とドッペルシュラク
 3. トリルのついたドッペルシュラク
 4. アンシュラク
 5. ドッペルシュラク付きのシュライファー
- 以上の装飾音に対応する譜例をつけて淡々と羅列していく形式で記される。

・マールブルクの教本2 (Die Anleitung)

作曲上の装飾について

第1クラス (主音符=記譜上の音の変化による)

1. シュヴェルマー (拍内で音を分割して小さな音価にする)
2. ハルトウंक (複数の同一音符を打鍵しないでとどめておく; シュヴェルマーの逆)
3. 先取音 (先行する主音符を先取りする)
4. アウフハルテン (前の音符を次に残す; 掛留)

第2クラス (音階的音型による装飾)

第3クラス (回転的音型: ターンによる装飾)

第4クラス (和声を分割しアルベジオにする)

第5クラス (以上の混合)

演奏上の装飾について

1. ベーブंक
2. アクサン
 - 1) 前打音, 2) 後打音
3. 2重前打音
4. シュライファー
5. ドッペルシュラク
6. トリル
7. モルデント
8. アルベジオ

演奏上の装飾は先のマールブルクの教本1で記された物とほぼ同じであると言っていいだろう。楽譜上の音の変形させることで生じる作曲上の装飾がそれに付け加わっている。作曲上の装飾については単に羅列しないで、ある程度体系性を持たせて叙述させている。

・パツハの教本

1. 装飾音概論
2. 前打音
3. トリル
4. ターン (ドッペルシュラク)
5. モルデント
6. アンシュラク
7. シュライファー
8. シュネラー
9. フェルマータの装飾

以上のように単に羅列するように装飾音ごとに項目分けがなされているが、各々の部分ではあらゆる場面での使用法、また装飾音同士の組み合わせが説明されている。

・ヴァイツラーの教本。

1. 装飾音全般
2. 前打音
3. 後打音
4. トリル
5. 長い音価についての装飾音について
6. 装飾音と運指法との関連
7. 装飾に対する繊細な判断の必要性
8. 不自然な装飾音への注意

運指法の時同様、譜例は全くなく各項目ごとに簡単な文章による解説が付くのみである。

・レーラインの教本

1. 前打音の4つのパターン（長い音符につく2つの場合、付点音符につく場合、短い音価につく場合、タイでつながれた音符につく場合）
2. 初心者の装飾音に対する取り組み方。
3. 最重要装飾音一覧表（論文末図1参照）
4. 初心者に必要な装飾音（トリル、アブツーク、モルデント、ドッベルシュラクを挙げる）
5. 曲の早さと装飾音の早さの関係
6. トリルの特記事項

前打音のみ詳しいパターン別説明が行われるだけで、そのほかは一覧表に挙げるのみである。

4-d) 装飾音の教程についての比較検討

基本的にはほとんどの教本で体系的記述だった指使いの項目とは違って羅列型の記述が多いが、特にバッハの教本は場面別の記述、装飾音の組み合わせの記述が豊富にあり詳細さでは群を抜いている。

それに対し、マールブルクの教本1ではそれぞれの装飾音を個別で説明した後に、それぞれの組み合わせごとにも説明している点で、バッハの物よりも整理されていて分かりやすい。

また、マールブルクの教本2に含まれる作曲上の装

飾はこの中では唯一の物である。この後、D. G. テュルクが1789年に記した鍵盤楽器教本1)には同様の記述がみられる。

これらに対し、レーラインには場面別の用法も、装飾音の組み合わせもほとんど記されておらず、重要な装飾音のみを一覧表にしてまとめるなど運指法の部分に引き続き非常に簡潔に記述されている。また、初心者に必要な装飾音や取り組み方を特に挙げていることから、初心者に向けた配慮がなされていることが伺える。

特にレーライン自身、初学者にはトリル、アブツーク、モルデント、ドッベルシュラクで十分と考えていたのであり、記述が少なめに見えたとしてもそれでも多めに記されたと思えるだろう。

5. まとめ

以上大まかなレーラインの第1版の内容と同時代に知られていたであろう鍵盤楽器教本を比較し、全体の内容構成と、運指法教程の部分と装飾音教程の部分を細かく比較考察した。これらを通して考えられるレーラインのこの教本の特徴は、1. 網羅性、2. 簡潔性、3. 初学者に使いやすいこと、の3つが挙げられる。そして、この3つはレーラインのこの教本を作成するに当たっての目論見であったのだろう。このことは、後にも幾度にわたって改訂再版され続けた人気を支える理由であったとも考えられる。

【注および主要参考文献】

- 1) Daniel Gottlob Türk (1789) *Klavierschule*
その他比較に用いた各文献はその詳細を本文中に示しているのでここでは割愛する。

(主任指導教員 千葉潤之介)

The image shows a page of a musical manuscript with two systems of staves. The first system is titled 'Das Zeichen' and contains two staves of music. The second system is titled 'Die Ausführung' and contains two staves of music. The music is written in a 3/4 time signature and features various trill exercises. The exercises are labeled with German text: 'Das simple Trillo', 'Das Trillo von unten herauf', 'Das Trillo von oben herab', 'Der kurze Mors deut.', 'Der lange Mordent.', 'Der weillteller ober abzug.', 'Der kurze Mors mit dem Nachschl. ge.', 'Der lange Anschlag.', 'Der lange Anschlag.', 'Der kurze Anschlag.', 'Der vermehrte Doppelschlag.', and 'Der lange Schmeiser.'. The manuscript includes various musical notations such as trills, mordents, and slurs.

図1 (G. S. Löhlein. "Clavierschule" 1765 p.15)

表1

	S. Lanbert (1702)	Couprin (1716/7)	Maichelbeck (1738)	Humano (1749)	Marpurg, Die Kunst (第 1巻:1750, 2第2 巻:1761)	Marpurg Anleitung (1754)	C. P. E. Bach(第1 巻:1753, 第2巻: 1762)	Weitzler (1757)	Löhlein (1765)	Wiedeburg (1765)
事前注意	○	○	x	x	○(第1巻)	○	○(第1巻)	○	○	○
楽典	○	x	○	○	○(第1巻)	○	x	○	○	○
装飾音	○	○	x	x	○(第1巻)	○	○(第1巻)	○	○	x
指使い	○	○	x	○	○(第1巻)	○	○(第1巻)	○	○	○
練習曲	○	○	x	x	x	○	○(第1巻)	x	○	x
演奏について	○	x	x	x	x	x	○(第1巻)	○	○	x
和声の基礎知識	x	x	○	○	○(第1巻、第2巻)	x	○(第2巻)	x	○	○
通奏低音の数字	x	x	○	x	○(第2巻)	x	○(第2巻)	x	○	x
レチタティーヴォ	x	x	x	x	x	x	○(第2巻)	x	○	x
数字なし通奏低音	x	x	x	x	x	x	x	x	○	x
即興演奏	x	x	○	x	x	x	○(第2巻)	x	○	x
その他特記事項 (Löhleinに含まれ ない項目含む)	移調	クーブラ ンの楽曲 中での難 しい箇所 の解決 法。	作曲法、対 位法につい て	コラール 演奏。旋 律法。音 楽の使用 法(音楽 論)			伴奏上の装飾音、オル ゲルブック、模倣、バ ス主題について、即興 ための例曲			コラールに よる実例付 き。指使い と和声の基 礎知識を同 じ章で叙 述。